

分科会 I

10月17日（木） 9：00～12：01 / フェニックスホール

座長 株式会社ケアフル・ケア 代表取締役 藤田 浩次 氏

座長 有限会社ひだまりの会 グループホームいぶき 管理者 田中 大介 氏

テーマ「地域拠点・地域連携・地域貢献・BCP・
自然災害・感染症・リスクマネジメント 等」

時間	演題 / 副題	所 属	発表者 (都道府県)
9:00 }	能登半島地震を超えて未来を展望する —BCP元年・事業継続化の本当の意味とGHの強みを考える—	グループホーム ひなたぼっこ	高橋美奈子 (石川県)
9:14 }	水害災害から入居者様を守る取り組みについて みんなで無事逃げる！ための避難訓練	グループホームヴィラ弘前	小松真利子 (青森県)
9:28 }	もう一つのわが家になるまで ～落雷を乗り越えて～	グループホームこいて	武石 佳歩 (新潟県)
9:42 }	認知症ケアの地域拠点となる施設を目指して ひとりになっても家で暮したい	グループホーム栄公	加知由美子 (大阪府)
9:56 }	縫い物で地域貢献 雑巾づくりと地元中学校への寄付	グループホーム まきやま	星 義典 (新潟県)
10:10 }	地域住民の一員として 顔のみえる関係づくり	グループホームグレイスフル日義	松原 浩昭 (長野県)
10:24 }	1人で抱え込まない地域を目指して認知症の方から学ぶ本当の優しさ ～繋がる？繋がって大切～	グループホーム すずらんあかり	原 拡里 (福島県)
10:38 }	コロナ禍で認知症カフェが再開するまで 繋がり続けることの大切さ	ふれあい青崎東・ふれあい大須・ チェリーゴード・府中みどり園	二井林恵理 (広島県)
10:52 }	地域の暮らしに根差したカフェへの道 一息つける居場所を開放	まりホーム熊野	渡邊 美香 (広島県)
11:06 }	共生社会への扉を開こう ～グループホームの役割とは～	グループホーム 寿限無	中村 健児 (東京都)
11:20 }	ICF構造を意識した施策 笑顔を導く相関関係	グループホーム さくら	石井 良典 (京都府)
11:34 }	地域住民のプラットフォームを作るために 地域居酒屋HORYOIの開催	グループホーム美和	今野 大祐 (茨城県)
11:48 }	三滝自由区へぜひ一度おこしてください！ ～そこで何が生まれるかは参加していただくみなさん次第です～	グループホーム 三滝ひまわり	玉田 将之 (広島県)
総 評			

能登半島地震を超えて未来を展望する

◆キーワード

- 1 災害・地震
- 2 BCP
- 3 人材確保

—BCP 元年・事業継続化の本当の意味と GH の強みを考える—

石川県・輪島市

グループホーム ひなたぼっこ

たかはし みなこ

たかだ なおみ

発表者：社会福祉士・看護師 高橋 美奈子 共同研究者： 高田 尚美

2ユニット18名のグループホーム

2004年8月グループホーム・居宅介護事業所開設
2007年4月（能登半島沖地震の直後）12名定員認知症対応型通所介護開設・自主宿泊・通所もやっている。

(はじめに)

2024年1月1日16時10分、輪島市は震度7.2の地震に襲われた。千年に一度ともいわれる地震で、最大地盤が4mの隆起し、大規模な山崩れに巻き込まれ多数の方が亡くなった。道路の崩落により救助が届かず、集落毎避難した地域など、2000人をこえる人が市外への避難を余儀なくされた。福祉や介護の施設の被害も大きく、大きな入所施設でも建物の損壊がひどく、ライフラインの復旧も長期に見通せないことから、石川県の指示のもと2次避難として県内、県外の他の施設に避難をした。

ひなたぼっこも、建物の損壊はさほど酷くはなかったが、ライフラインの復旧の見通しが立たず、職員の全員が被災し、避難所から2次避難の選択をしなければならず、広域避難するかどうかの選択に迫られた。その避難がどんなものであったか、BCP元年において紙の上ではない事業継続化とはどういうことなのかを考察したい。

(倫理的配慮)

法人には口頭で了承を得ている。

(具体的な取り組み)

BCPに基づいて、ディは休止、対策本部を立ち上げるが、対策本部自体はマニュアル通りには機能しなかった。そもそもマニュアルで考える1週間くらいで復旧する事態でなく、長期にどうするのかの未知の領域だ。車が家屋の下敷きになってつぶれた職員も複数おり、地割れした道路を徒歩でやってくる、夜間は道の状態がみえないので、移動しないようにするなど、来れる職員が手探りでシフトを組んで入居者のケアに当たってくれた。電気の復旧は5日ほどできたが、余震が頻発する中、エレベーターは使用できず、1階に集めてケアに行った。水汲みなどには行けないので、市の職員、D-MATが届けてくれ、物資なども届いた。11日にインフルエンザで入院する利用者が出て、一つのユニットで蔓延する。職員も罹患し、かなりケアの継続が苦しくなる。他の施設での広域避難もはじまり、職員たちも浮足立つ。私は、福島で広域避難（せざるを得ないが）により利用者が亡くなった話を聞いてきたので、出

来れば輪島に留まりたいと考えていた。しかも、認知症の方にとって環境の変化のストレスは大きい。一人、一人と切り離されていって、混乱し暴力的になる。拒食したり、寝たきりになる。どこで亡くなったかわからない。というのは絶対に避けたかった。避難するなら丸ごとこだわった。ボランティア要請もしてGH協会石川支部の計らいで日本ホスピス協会の看護師が15日から入った。手を尽くした結果、廃業したGH跡を借りることができ、そこで職員も含め、輪島市の福祉避難所となることになった。家賃や水光熱費も災害救助法からでることになり、1月23日、自衛隊によって「かほく市」へ丸ごとで避難した。ケアに当たる職員は、20人いた職員のうち半分以下の9人、それと全国より来てくれたボランティアによって行われた。すでに廃業していた施設なので介護報酬を請求することはできない無収入の中、福祉避難所としての経費、利用者の食費などの手当てはあったがすべての費用は償還払いである。職員の休業補償・福祉避難所の運営、キャッシュフローに不安を抱え、主治医がいない中で綱渡りの3か月を過ごした。上下水道が復旧したので、4月19日輪島に帰還する。定年退職の職員も含め、2次避難の場所を基盤として生活の再建をする職員もいて、結局全部で8名、40%が7月までに離脱した。4月の時点で仮設住宅に入れた職員は1名のみ。輪島に戻っても引き続きボランティアに入れなければ、ケアの継続は難しい。しかし、一つでも施設が復旧する、利用者が丸ごと帰ることが、必ず被災地の灯になると考え帰還した。

(今後の課題・考察・まとめ)

輪島市の人口は、2035年の人口となる推計されている。すでに課題であった介護人材不足、過疎の問題をさらに10年早めた。私たちは、恒久的に人材を派遣するシステムづくりに取り組んでいる。必要なサービスを本当に持続的に提供するには、人材を育て安定的確保することが必須であり、事業者の壁も超えていく必要性にも言及している。能登方式のこれからの希望をみている。最後に多くの方々にも物心両面で支えられている。心から感謝を申し上げたい。

水害災害から入居者様を守る取り組みについて

◆キーワード

- 1 避難訓練
- 2 水害対策

みんなで無事逃げる！ための避難訓練

青森県・弘前市

いりょうほうじん

医療法人サンメディコ グループホームヴィラ弘前

ひろさき

こまつ まりこ

発表者：介護福祉士 小松 真利子

とのさき みやこ

共同研究者：管理者 外崎 美矢子

3ユニット 入居者様27名 平均介護度 2.3
 スタッフ数25名
 施設は平屋1階立て 屋上はなし

施設理念 ホットする？ヴィラ弘前
 自分らしく おもいやりがある
 居心地のいい グループホーム

(取り組んだ課題・はじめに) 当施設は、青森県南部を流れる1級河川である平川、後長根川と、青森県中西部を流れる1級河川である岩木川が合流する地点の2km先にある。岩木川沿いにある堤防が決壊した場合、施設には1時間以内に氾濫水が到達、3～5mの浸水が想定されている。

2022年6月から、当施設の避難先である弘前医療福祉大学短期大学部、地域安全防災研究所の講師の方々のご協力の元、年に1度共同で避難訓練を行っている。

2022年の8月9日、弘前市に大雨が降り、岩木川の氾濫の恐れがあったため、入居者様と避難先の学校へ避難し、そのまま一晩を避難先で過ごすこととなった。直前に避難訓練を行っていたため、避難自体は比較的スムーズに行えたが、実際に避難先でのケアを行ってみると、たくさんの課題や問題点が見えてきた。

実際に避難した経験を踏まえて、毎年課題を解消しながら取り組んでいる水害対策避難訓練について発表する。

(倫理的配慮) 発表にあたり、関係者に許可を得ている。

(具体的な取り組み) まず避難にかかる時間の短縮をするため、防災委員会を中心に、荷物の見直しや事前に行うリスト等の見直しを行った。避難先でのケアの負担を軽減するため、新たに必要物品に簡易ベッドやポータブルトイレも追加。どの職員でも、荷物をスムーズに運び出すことが出来るよう、優先準備が一目でわかるように目印をつけるなどの工夫もした。事前に準備されているもの、避難終了後に再度補充をするものなどわかりやすいよう数量などを明記した荷物のリストなども作り直した。

その他に、車いすの入居者様が多く、またターミナルケア中の方もおられ座位の保持が困難な方も多

いため、事前にどの入居者様をどのスタッフの車に乗せることが出来るか話し合いシミュレーションし、実際に乗車していただく訓練も行っている。

(活動の成果と評価) 1回目の避難訓練では、警戒レベル1～3(レベル3の段階で避難は完了しているものとする)の場面を想定し、合計時間71分かかり避難が完了した。翌年行った2回目の訓練では合計時間63分で避難完了。前回より時間を8分短縮することが出来た。

2024年6月に行った3回目の訓練では入社2年目のスタッフに指示役を行ってもらいながら指導したが、50分で避難を完了することができた。

先生方からも「年々スムーズに行えるようになってきている」と評価頂いている。スタッフのほとんどが実際の水害避難を経験しており、自主的に考え行動が出来るようになってきている。また、避難訓練を行う事で一人ひとりの防災に対する意識も変わってきていると感じる。

(今後の課題・考察・まとめ) 荷物の見直しは随時行っているが、どうしても持ち出し物品が多くなってしまふこと、積み込み物品が多く運転時の安全が保てていないこと、物品の保管場所の確保や管理などが課題としてあげられる。

他に、避難先で感染症が発生した場合の細かな対応方法、ライフラインが全く止まってしまった場合の避難先での対応についても細かに対策を練る必要がある。また、今までは夏から秋にかけて夏季対応の水害対策のみ行ってきたが、温暖化により冬季も雪ではなく雨が降ることが増えたため、寒い季節の避難準備も急務であると考えます。

まだたくさん課題はあるが、最低限・最大限のスタッフの人数、そのどちらでも、誰でも、どんな時でも対応できるように、今後も全スタッフに訓練内容を周知し、有事の際には安全に避難できるように努めていきたい。

もう一つのわが家になるまで

◆キーワード

- 1 もう一つのわが家
- 2 新しい環境
- 3 過ごしやすい環境

～落雷を乗り越えて～

さくらのさとふくしかい ぐるーぷほーむこいて

新潟県西蒲原郡弥彦村

桜井の里福祉会 グループホームこいて

たけいし かほ

発表者：武石 佳歩

こいてすたっぷいちどう

共同研究者：こいてスタッフ一同

米どころ新潟県のほぼ中央にある越後平野、佐渡弥彦
 国定公園の弥彦山のすそ野に当グループホームがあ
 る。

認知症対応型共同生活介護「グループホームこいて」は、
 1 ユニット 9 名の入居者とデイサービス登録ご利用者 3
 名と一匹の犬が生活している。

(取り組んだ課題・はじめに)

令和 4 年 11 月 8 日にグループホームこいて(以下
 こいて)で落雷にともなう火災が発生し、ご利用者
 にとってもう一つのわが家を失ってしまった。新し
 いこいてに戻るまで住居を 4 回変え、不安な生活を
 送るなかでも「皆と一緒に安心だ」とご利用者が
 言って下さり、住居を移る度にご利用者の安全を第
 一に考え、意見を聞きながらその場所に合った環境
 作りを行ってきた。カーテンやパーテーションでプ
 ライベートスペースの確保をしていたが、日中そこ
 で過ごされることはほとんどなく、落ち着ける場所
 ではなかったのだと思う。そんな生活の中でも「皆
 がいるから心配じゃないよ」と話され、馴染みの人
 と過ごすことで不安が軽減されていたのだと感じた。
 地域の方、ご家族の協力や後押しがあり同じ場所
 の再建が決まり、「もとの場所へ戻れるの?」「でも、
 道具とか全部なくなっちゃったんでしょ?」と喜び
 と不安が混じった意見が聞かれていた。そこで、新
 しくなったこいてに戻り「こいてらしさ」とは何な
 のか、ご利用者にとって居心地の良いもう一つのわ
 が家とは何なのかを考え支援を行った。

(倫理的配慮)

今回の発表について資料・写真等はご本人、ご家
 族の了承を得ている。

(具体的な取り組み)

- ①居心地のいい居室になるよう環境を整える。
- ②安心して過ごせる空間作りをする。
- ③環境が変わる中でも行っていた家事仕事を継続し、
 ご利用者に生活の中で役割を持っていただく。
- ④こいてで過ごすからこそその楽しみを生活の中で見
 出してもらえるよう関わる。

(活動の成果と評価)

①居室の場所を決める際、ご利用者から「公平にク
 ジ引きで決めるのはどうですか?」と提案があった
 ので意見を取り入れながら居室を決め、事前に見取
 り図を職員と一緒に見ながら場所を確認し、表札を
 見て「ここだね」とご自分の居室だと認識されてい
 た。各居室についてはご利用者から要望を聞き、ご
 家族の協力を得ながら、思い出のある写真や家具を

持ってきていただけた。それでも当初は「またどこ
 か引越すするんだろ?」と不安な様子で話す方もお
 られ、職員がその都度納得していただくまで説明を
 行ったことで「ここ私の部屋だね」と次第にご自分
 の居室だと認識されるようになっていった。

②トイレやお風呂場など環境が変わったものは、使
 いやすいよう物の配置を変えたり、弥彦村役場の協
 力の下、エアコンや外灯など必要だとわかった物品
 を購入したりその都度環境整備をしている。食席も、
 ご利用者のトイレの頻度や歩行状態を配慮しながら
 できるだけ気の合うご利用者同士で座れるよう意識
 した。また、「景色がいい方が暮らしていて楽しいよ
 ね」と、ご家族のご厚意で敷地内に芝桜を植えてい
 ただいた。ご利用者と相談し金木犀を植えたり、プ
 ランターに花を植えてもらったり、ご自分の家とし
 て庭作りにご利用者にも参加してもらった。

③日々の調理の手伝いや、テーブル拭き、床掃除、
 たたみ物、ゴミ捨てなど以前から行っていた家事仕
 事を継続して行った。ご自分から「何かすることな
 いの?」と声を掛けてくださったり、他ご利用者同
 士協力されながら役割を持った生活を過ごされた。

④天気の良い日は散歩のお誘いをしたり、ご利用者
 と一緒に敷地内にある畑で作業したり、ご利用者の
 要望を聞きながら買い物や外出、行事を楽しんでい
 ただいた。火災前にはできていたが、火災後の住居
 では急な坂道や階段があったことからできなくなっ
 ていた支援を改めて行い、ご利用者の笑顔をたくさ
 ん見ることができた。

(今後の課題・考察・まとめ)

火災を乗り越え、新しくこいてで生活をスタート
 させるなかでご利用者の笑顔にたくさん勇気付けら
 れ、「こいてらしさ」とはご利用者の笑顔であると感じ
 ました。今回の取り組みでご利用者から「やっぱりこ
 こが一番だね」と言ってもらい、ご利用者それぞ
 れがこいてをもう一つのわが家だと認識し、安心し
 て過ごせるような環境を作ることが「こいてらしさ」
 に繋がるのだと思った。今後も笑顔で過ごせるこい
 てであるように日々関わらせていただきたいと思います。

認知症ケアの地域拠点となる施設を目指して

◆キーワード

- 1 地域拠点
- 2 延長デイ
- 3 多職種連携

ひとりになっても家で暮したい

大阪府・泉佐野市

しゃかいりょうほうじんえいこうかい
社会医療法人栄公会

えいこう

グループホーム栄公

発表者：介護職 加知 由美子

かち ゆみこ

共同研究者：山下 万友美

やました まゆみ

【施設概要】

2001年1月1日開設1ユニット9名
2006年4月1日2ユニット18名に増設
2023年4月1日高齢者複合施設ジリタス3階に移転
サービス内容：入居・共用型デイ・緊急ショート

【理念】家庭的な環境のもと、生活の継続性と個別性を尊重し楽しみのある生活を支援します。

(取り組んだ課題・はじめに)

当グループホームは、短期利用サービスと共用型デイサービス（以下、「デイ」という。）事業を併設している。地域に暮らす認知症高齢者の在宅での生活を支援し、介護を担う家族の安心を支える為、この多機能性を最大限に活かして認知症ケアの地域拠点となれるよう、泉佐野市では数少ない共用型デイの延長サービスを開始した。

(倫理的配慮)

今回の発表に伴い、ご本人・ご家族に発表の趣旨、協力の任意性、個人情報保護、途中取り消しの自由、相談窓口についての説明を行い、ご理解を得て同意書に署名をいただいている。

(具体的な取り組み)

現在延長サービスを利用されているT氏の事例
T氏男性、要介護1。令和5年6月利用開始。

妻と二人暮しだったが妻が令和5年4月にグループホーム栄公に入居し独居となる。当初は週2回通所介護、月～金訪問介護を利用、土日は家族の支援で在宅生活を送っていた。本人は妻と別居による消失感や、生活の中で出来ない事が増えていくことによる不安感に襲われた。「本人がデイのない日は閉じこもりがちであり認知症が進行するのでは。」や「食事摂取や服薬はできているか不安。」と、家族からも相談を受けた。

ケアマネジャーとともに、本人・家族の様々なニーズに応えるべくデイ延長サービスと、在宅生活全般の課題解決に向けた定期巡回サービスの併用利用を提案し、在宅生活の継続を支援することとなる。

月・火・木・金のデイ延長サービスを利用開始。利用時間は8:30～18:45までで、夕食を終えてから帰宅。デイのない日は定期巡回により昼・夕のお弁当の配食サービスや服薬見守り、掃除等の生活援助が行われ、土日は家族が訪問し支援を行なっている。

内服薬飲み忘れ防止の為、朝・夕食後薬をデイ利用時に服用、血圧が変動し皮膚状態が悪い為、グル

ープホームと契約の看護師と連携、ADL低下防止の為、同理学療法士と連携し個別機能訓練を実施、管理栄養士による栄養管理等多方面からアプローチを行う。

また、入居されている妻と関わる時間も確保する。

(活動の成果と評価)

当初はデイ利用を拒否される事もあったが、現在は利用を楽しみにされている。認知症の進行による不定愁訴に対しては都度職員が傾聴し返答することで安心され表情も和らいでいる。歩行に不安があったが理学療法士が評価して個別プランを実施することで、膝屈曲歩行やすり足だったのが、自身でも意識して膝を伸ばして歩行できるようになっている。

全身に皮膚炎症があり痒みがひどかったが、看護師との連携で皮膚状態を観察し皮膚科受診に繋げ利用日には外用薬を塗布することで改善してきている。

本人からは心配事が減って嬉しい、色々な人と話ができて楽しい、毎日出かけられ張り合いがあると前向きな発言が増えている。家族からも、独居でも丸一日一人で過ごすということが無くなり安心して、また、血圧の変動等利用前は分からなかった体調変化にも気付けるようになった為、早期に対応する事ができている、活気も出てきており利用できて良かった等の言葉をいただいている。

(今後の課題・考察・まとめ)

デイでの様子や気づきを多職種に発信し、また在宅での様子も確認、情報共有することで、家族も含め包括的にT氏の生活を支えることができている。

認知症であっても、張り合いや楽しみを持って自宅での生活が継続できるよう、引き続き多職種と連携し地域資源を有効に活用しながら認知症ケアの地域拠点となれるよう取り組んでいきたい。

(参考・文献など)

縫い物で地域貢献

◆キーワード

- 1 地域貢献
- 2 認知症ケア
- 3 フレイル予防

雑巾づくりと地元中学校への寄付

新潟県・長岡市

グループホーム まきやま

発表者：相談員兼介護職員 星 義典

共同研究者：高野 剛

社会福祉法人長岡三古老人福祉会が経営する8つのグループホームのうちの一つ。隣接地にはもう一つのグループホーム、特別養護老人ホーム、デイサービス、ホームヘルプステーション、包括支援センター、居宅介護支援事業所、認定こども苑などがあります。

1ユニット9名定員の施設です。大工職人による雪国特有の昔ながらのせいがい造りを採用した建物で、中庭には日本庭園が広がり、敷地内に園芸活動用の畑もあります。敷地内の花壇や畑などを生かし、ご利用者が外気に触れる機会を作りながら、生活の中での楽しみと共に今ある力を発揮できる機会を大切にしている施設です。

(取り組んだ課題・はじめに)

2020年、新型コロナの流行によりグループホームと地域の交流や参加の機会が絶たれました。その後、社会全体が感染症への対応と新しい生活様式へと徐々に変革をしていく中で、グループホームとしても小さな取り組みからと、これまで交流を行っていた中学校へご利用者と一緒に育てた花を届けるという取り組みを行いました。地域密着型施設としての取り組みでしたが、もっとご利用者が主体的に関われるもの、ご利用者の昔なじみの「力」をお借りして「縫物をして寄付する」に取り組んでみました。

(倫理的配慮)

この研究発表に際し、ご利用者・家族、地域(中学校、生徒)に説明し承認を得ています。

(具体的な取り組み)

寄付をする中学校も日常に雑巾を使用しており必要であると快諾もあり、雑巾100枚を目標に取り組みを始めました。ご利用者に縫い物に参加していただく趣旨として、①参加していただくきっかけ作り、動機づけをしながら、なじみの作業に参加し、やりがいを持てる機会を作る。②ご利用者同士でなじみの作業を行いながらの交流。③なじみの作業を通して過去を回想するきっかけ、脳の活性化。以上3点を狙いとして、部署内の余剰のタオルを材料に5月より雑巾作りを始め、100枚を作成し、中学校へ寄付することとなりました。

(活動の成果と評価)

裁縫のできるご利用者(総員9名中5名ほどが参加)と見守り担当の職員(日中の職員が交代で担当した)とで力を合わせ、9月後半に目標である100枚を達成しました。見守りの職員は作業に手を出すことは糸を通す程度で、後はほぼご利用者が中心となつての製作でした。

予定通り10月に中学校へ職員2名、ご利用者2

名で向かい、中学生代表1名、教師1名へ雑巾の寄付および軽い歓談を行いました。「大事に使ってね」というご利用者からの声掛けに、生徒は笑顔で応対されていました。

目標を目指して協力する姿勢がご利用者同士の交流となり、ご利用者の心の内にやりがいが生まれ、指先を動かすことにより認知症の予防およびフレイルの予防を行うことができ、取り組みとしては成功であったといえます。

(今後の課題・考察・まとめ)

取り組みを行う前は針と糸を使うことによる怪我の危険性や目標数を縫うことができるか等マイナス面ばかりが職員の中にあり、ご利用者の残存能力の把握および活用の阻害になっていたように思います。

これからもご利用者の出来ること、意欲を引き出し、いきいきとした生活を送っていただけるように、地域交流を続けていけるよう取り組んでいきます。

(参考・文献など)

『作業療法士がすすめる認知症ケアガイド 行動心理症状の理解と対応&活動の使い方』(2020) ローラ・N・ギトリン、キャサリン・V・ピアソン著 西田征治、小川真寛、白井はる奈、内山由美子訳

地域住民の一員として

◆キーワード

- 1 社会参加
- 2 地域住民
- 3 支え合い

顔のみえる関係づくり

長野県・木曾町

ぐるーぷほーむ ぐれいすふる ひよし
グループホーム グレイトフル日義

まつばら ひろあき

発表者：松原 浩昭

ほそかわ ゆきえ

共同研究者：細川 雪恵

当事業所がある長野県木曾町は、木曾川や木曾駒高原、開田高原など自然豊かな名所が各所にある魅力的な地域である一方、高齢化率42.2%、人口減少がすすみ、独居老人、老々介護が顕在化している地域である。

2003年開所 2ユニット18名 デイサービス併設の事業所です。できる限り今までと変わらぬ生活を送っていただくよう職員一丸となって支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

感染症対策の影響により、利用者様の外出・社会参加は、長く中断せざるを得ない状況であった。当事業所においても、新型コロナウイルス感染症の罹患により、ADLの低下、認知症状の進行、活動に対する意欲低下がみられた。昨年からの外出や面会の再開、対面での交流が再開されたが、長く続いた制限された生活は、利用者様だけでなく、事業所がある地域においても影響を及ぼしていた。人と人が対面で交流する場が減少し、顔が見える関係がなくなっていたことに気づいた。そのため、外出や地域の社会参加を再開し、顔が見える関係を再構築するために取り組みを行った。

(倫理的配慮)

今回の研究発表について、個人が特定できないよう配慮し、利用者様・ご家族に了承を得た。

(具体的な取り組み)

木曾町は、年々人口減少、高齢化が進み、人口は1万人を割り、高齢化率42.2%（全国平均28.7%）となっている。また、独居老人や孤独死といった課題が顕在化している地域である。地域の課題解決の糸口として、コロナ禍で閉じこもりに慣れてしまった状況を改善し、地域の中で顔のみえるつながりを作っていくことが必要と考えた。当事業所職員のほとんどが地元木曾町出身であり、利用者様や地域のために、開かれた施設でありたいと考えた。

まずは、社会福祉協議会や区の担当者に地域サロンの活動状況を確認した。地域の高齢化と担い手不足の影響から活動自体が下火になっている状況にあることが分かった。行政と地域の方と一緒に当事業所がある下町地区のサロン「下町サロン」を再開し、地域住民と事業所と一緒に活動を開始した。

(活動の成果と評価)

事業所では、サロン参加をきっかけに、ADL低下、活動意欲が低下していた利用者様を少しずつ外へ連れ出す活動を行った。利用者様と一緒に施設周辺の散歩や

近隣スーパーへの買い物、周辺観光地へのドライブなど、施設から地域へ出ていくことに少しずつ慣れていくことができた。結果、今まで外出しないことが当たり前だった利用者様や職員の意識が施設の外、地域に向いていくようになった。地域のスーパーへの買い物では、旧知の方とお会いして、会話を楽しまれたことで、施設に帰ってきてからも笑顔で話をされる姿が印象的であった。

下町サロンでは、4月は手玉づくり、5月は合唱会、6月は朴葉巻き（木曾季節の名物）を一緒に作り、地域住民の皆様と親交を深めた。特に6月は、地域の方をグループホームにお招きして開催した。開催にあたり、地域の回覧版やチラシの配布、グループホーム新聞を用いてお誘いした。昔話に花を咲かせる時間となり、また、地域の方に事業所や利用者様の生活について知ってもらう機会となった。サロン以外にも、地域とのつながりを再構築するため、施設見学会、施設行事への招待、消防署と合同の防災訓練を行うなどして、地域に開かれた施設として認知いただけるよう取り組んだ。利用者様が生き活きと活動する姿をみることができた。

(今後の課題・考察・まとめ)

サロン活動や施設見学会、ご家族や地域の方が集まる機会について、まだまだイベント感があり、日常的な活動となっていない。いつでもご家族や地域住民の方が施設に来て、一緒に料理をしたり、外出を楽しむ、お茶会をする、など「いつもの風景」となるように取り組みを行っていきたい

また、サロン活動に、認知症専門の事業所としての強みを活かし、地域住民を対象とした認知症講座を開催するなど、地域の介護予防、認知症予防にも尽力していきたい。事業所と地域がつながり、お互いに支えあう、見守り合える関係を築き、社会的孤立改善の一助となっていきたい。

(参考・文献など)

木曾地域の医療を取り巻く現状：長野県木曾保健福祉事務所・地域医療情報システム

◆キーワード

- 1 認知症伴走型支援
- 2 共用型デイサービス
- 3 地域拠点

～繋がる？繋がりって大切～

福島県・須賀川市

グループホーム すずらんあかり

かんりしょく はら ひろのり

発表者：管理職 原 拓里

認知症伴走型支援、共用デイを開始して

認知症伴走型支援、共用デイを開始し、グループホームの入居者、職員の変化、地域拠点になるために必要なこと

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホームの空き状況や、申し込みなどの連絡が、ケアマネジャーや認知症の方を介護しているご家族からの問合せは今までもあった。しかし、グループホームと聞いて、見学に来て、実際に見て、初めてグループホームを知るという方も多くいることが現実。今介護している方、介護されている方、これから介護するかもしれない方が、困った時に思い浮かぶ場所でありたい。グループホームが地域の拠点(困った時に思い浮かぶ場所)となるようにしたい思いがあった。その中で、認知症カフェ、認知症伴走型支援、共用型デイサービスを開始した事により、グループホームを知って頂く機会を少しずつ作ってきていること、伴走型支援をきっかけに広がっていく社会資源。介護に必要な、「一人で抱え込まない」地域作りを目指して取り組んでいる。

(倫理的配慮)

取り組み内容、サービス中の様子など、利用者、家族へ説明し、承諾を得ている。写真なども使用可。

(具体的な取り組み)

認知症伴走型支援に関しては、認知症の進行に伴い、このままでは共倒れしてしまう。受診の対応が難しい。介護サービス事業所が受け入れてくれない。など様々な相談を電話、メール、直接訪問にてお受けしております。伴走型支援では、どのような相談内容でも、ご自宅に訪問させて頂いたり、「ご本人とお会いさせて頂く」ことを大切にしております。訪問回数を重ね、伴走型支援の職員だけではなく、グループホームの入居者さんにもお話し相手をお願いをし、訪問したこともあります。また、デイサービスや、グループホームに見学やお茶飲みに来て頂いたりもしている。人と人との繋がり、社会との繋がりを作ることによって、全ては解決しませんが、今困っていることを、一緒に考えるきっかけ作りを行っている。

共用型デイサービスを通して、9人の共同生活の中に、新しい人が入ることで、不安しかなかった職員。しかし、共用型デイサービスをきっかけに、生活に刺激が生まれ、自発的な行動や言葉が多く聞かれるようになりました。

(活動の成果と評価)

認知症伴走型支援、共用デイを通して、グループホームを知って頂くきっかけとなったとともに、困った時に、困る前に、相談してみよう、聞いてみようという場所に少しずつなれてきている。地域の方が、直接相談にきたり、専門職の方からも相談が増えてきております。困りごとがすぐ解決までにはいきませんが、ずっと家にいた人が、訪問を重ねていくうちに、外へ出てドライブにいけたり、成果や効果は少しずつではありますが、

(今後の課題・考察・まとめ)

グループホームだけではなく、福祉施設が、困った時に、思い浮かぶ場所の一つになっていけたらと思います。グループホームや伴走型支援と聞いても、「どんなところだろう」「行きづらいな」「まだ関係ないな」という気持ちの方が多いかもかもしれません。その中で地域の拠点となるよう、毎月行っている認知症カフェ、不定期開催ではありますが、認知症の方が店員さんになるハブニングラーメン、認知症に関する情報を発信し続けていきたいと思えます。認知症は、誰にでも、どの家庭でも起こりえることです。認知症に関して、身近に感じて知ってもらいたいと思えます。

(参考・文献など)

コロナ禍で認知症カフェが再開するまで

◆キーワード

- 1 コロナ禍での活動
- 2 地域連携
- 3 認知症カフェ

繋がり続けることの大切さ

広島県・府中町

ふれあい青崎東^{あおさきひがし}・ふれあい大須^{おおす}・チェリーゴード・府中みどり園
(府中町 GH 連絡会)

発表者：管理者 二井林 恵理^{にいばやし えり}

共同研究者：チェリーゴード 山廣綾、ふれあい大須 橋本栄作、府中みどり園 伊名波宗一郎・小代 桜

府中町 GH 連絡会は平成 24 年に府中町のグループホーム 4 つが自主的に創った連絡会。地域に認知症ケアを広める活動をしている。

府中町グループホーム連絡会（チェリーゴード、ふれあい青崎東、ふれあい大須、府中みどり園）

(取り組んだ課題・はじめに)

広島県の府中町では 4 つの法人が異なるグループホームが『府中町グループホーム連絡会』を各ホームの管理者たちが自主的に平成 24 年から立上げ現在に至る。府中町グループホーム連絡会では、平成 26 年から『認知症カフェ椿』を始めていたが、コロナの時期に 3 年ほど休止していた。休止していた中でも連絡会として地域に対して何か出来ないかと模索し、つながり続けてきて、令和 5 年から認知症カフェを復活した。復活までの道のりと、コロナ期間中に何を目的に、どのようにつながり続けてきたのか、どうして繋がり続けることが必要なかを報告したい。

(倫理的配慮)

事例として個人的な何かを取り上げる報告ではないが、この報告に関わる個人情報については個人に説明して承諾を得ている。

(具体的な取り組み)

令和 2 年から 4 年末までコロナの勢いは止まらず、地域活動や認知症カフェを休止せざるをえなかった。しかしこのような時期だからこそ、つながり続け、考え続けることで、再開できることを信じてきた。この間、オンラインで毎月会議を開催し、お互いの状況の報告やコロナの状態を伝えあい励まし合うことをしてきた。なかでも、コロナになりどこの介護施設でも職員は外出すらままならず、ましてや感染対策上、ほかの施設の職員とつながることは難しかったが、ほかの施設の職員とオンラインでつながり、お互いのホームの紹介やコロナ禍での悩み、しんどさを話す場を設けてきた。コロナ時期にそれぞれのホームに就職した職員は他施設へ見学に行くことすらなかったのも、オンライン交流会は他施設の取り組みを知り、自施設について考える良い機会となった。つながり続ける中で令和 5 年に認知症カフェ椿を復活させた。活動再開にあたり、ほかの地域の認

知症カフェの様子を役所の担当者に確認したり、再開にあたり、支援してもらえるような相談窓口がないかなど、調べてみたものの、個別のカフェ再開にあたり、そのような窓口はなく、最終的な判断は府中町グループホーム連絡会のメンバーの『再開したい気持ち』だった。当初 1 年はコロナ中の出控えが継続し、2 人から 5 人程度の参加者も令和 6 年の今では 10 名の方が利用され、地域活動も活発となっていった。

(活動の成果と評価)

つながり続け、お互いの状況を把握し続けてきたおかげで、認知症カフェの再開時期を決めることも決めた後すぐに動くことも出来た。

また、町内でなかなか活動ができない認知症カフェから相談があり、どのような状況で再開してきたかということの体験を伝えることで、現在もう一つの別の団体の認知症カフェも再開することが出来た。

一つの認知症カフェの体験がほかの認知症カフェの活動にも影響を与えることが出来たのは意義深い。

(今後の課題・考察・まとめ)

認知症カフェを再開するにあたり、広報活動を行っていたが、町内会も活動を休止していたり、ボランティアなども活動を休止していたので、今まで広報していた場所に周知してもつながりにくかったことがあった。それぞれの施設の入居者様ご家族に声をかけたり、また活動日時を変更したりしながら様々に模索しながら現在の状況をつくることが出来た。今後も感染症や災害などがあつた時に活動が休止になることも考えられる。その時に①カフェの母体となる連絡会がつながり続けること②今回の経験を生かして、再開当初の広報の方法を考える③近隣のほかの同じような活動をしているカフェとも日ごろから連携をしておくことなど、改めて結果を振り返ることが出来た。

(参考・文献など)

地域の暮らしに根差したカフェへの道

◆キーワード

- 1 地域拠点
- 2 地域貢献
- 3 認知症カフェ

一息つける居場所を開放

広島県・福山市

にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご・まりほうむくまの
認知症対応型共同生活介護・まりホーム熊野

かんりしゃ・わたなべ みか

発表者：管理者・渡邊 美香

共同研究者：藤井美智子(CW) 三笠正則(検査技師)
藤井貴宏(理学療法士) 白川香苗(管理栄養士)
大原美樹(地域包括支援センター赤坂認知症地域支援推進員)

介護と医療の連携が強固で、専門職からのアドバイス
を随時もらいながら、質の高いケアを目指している。
自然豊かな田園風景が広がる穏やかな環境下の中に
立地されているグループホームである。

住み慣れた地域において、馴染みの関係を築きながら、
住民と共に安心した穏やかな日常生活が送られる様に、
専門職や地域資源を活用しながらサービスの向上に向け
て取り組んでいる。

(取り組んだ課題・はじめに)

福山市熊野町は、2024年(令和6年4月)現在、
人口2,089人。その内、約半数に近い984人
が高齢者である。地域の実状に沿って、認知症にな
っても、住み慣れた地域で安心した暮らしが出来る
様、地域福祉の向上に貢献する事は、重要な使命で
あると考える。認知症啓発や、地域の拠点となる為
の取り組み手段として、カフェ開催の実現までと、
今後の課題を報告する。

(倫理的配慮)

研究発表に際し、協力関連機関や利用者、家族に説
明し、運営推進会議等で説明、書面により同意を得
ている。

(具体的な取り組み)

運営推進会議等の話し合いの場で、認知症地域支援
推進員や民生委員から、地域の実態や様々な情報を
もらい、活動のステップの切り出し方のヒントを得
た。高齢者が毎週集う集会所で実施されている10
0歳体操や、地域の交流館での活動内容を聞き、現
場に出向き、一緒に体験させてもらった。そこで、
体操参加の意義や、もっと知りたい情報があるかな
ど、現地の生の声を聴く事ができた。
実態と要望が出揃ったタイミングで、活動的で健康
意識の高い地域カラーから、“ヘルスケアカフェ”と
いうネーミングで、交流館を借りて、施設から発信
できる内容を詰めていく事にした。
協力体制として、当法人の母体である病院から専門
職や、地域包括の認知症地域支援推進員、又福祉用
具取扱店の紹介もあり、住民の要望にマッチしたミ
ニ講座と資料の作成をした。カフェ開催の周知に関
しては、広告を作成し、交流館に依頼して、回覧板
にしたり、100歳体操を実施している時間帯に出
むいて、参加を募ったり、電話案内するなどした。
カフェは、専門職からのミニ講座、施設職員から認

知症のお話、体験コーナーの3部構成として、集ま
った住民の皆が、出来る限り有意義な時間が持てる
様にスタッフを配置し、来て良かったと思ってもら
えるような関わり方や時間配分を考えた。施設入居
者が作ったうちわを手土産に、又カフェ参加時に、
骨密度や筋肉量を測定したデータ等を渡す等して、
印象に残る様に工夫もした。参加後にアンケート用
紙へ記入をしてもらい、次のテーマの参考にした。

(活動の成果と評価)

毎月カフェ開催時には、15人前後の住民の方が集
い、自分を知る機会をもてた事の喜びの声や、今後
の自身の機能維持や向上に向けて、課題発見ができた
といった声を聴く事が出来た事は大きな収穫であり、
カフェ開催の目的に近づいていると感じた。ただ一方
で、皆が満足できるカフェをと考えていたが、地域
という小規模な単位が、逆に、本音で語る事が出来
なかつたり、認知症のある高齢者を持つ家族の苦
悩であったり、認知症症状に関する困難事例等、
内情の相談を抱えている住民の方々の悩んでいる実
態もある事も課題に上った。本来目指していたカ
フェと若干ずれがあるような、違和感を覚えた。これ
らの経緯から、その後のカフェ開催の場を施設内ホ
ールに移して開催している。今、支援が必要な人、1
人ひとりに、ゆっくりと向き合える、そんな穏やか
な環境が必要だと考えたからである。

(今後の課題・考察・まとめ)

現在は、お琴の演奏会から始まり、お茶を楽しみな
がら、団らんした後、だるま作りを楽しんでいる。
時には専門職からの情報も組み込んでいく事も想定
している。その中で、ほっと一息出来る時間が持て
たら、又来たいな、話がしたいなと思える空間や居
場所の提供が出来ればと、考える。今後も地域と共
に安心できる暮らしの提供の実現を目指していきたい。

共生社会への扉を開こう

◆キーワード

- 1 地域連携
- 2 認知症カフェ
- 3 地域拠点

～グループホームの役割とは～

東京都・八王子

にんちしょうたいおうがたせいかつかいご ぐるーぷほーむ じゅげむ
認知症対応型生活介護 グループホーム 寿限無かいごふくしし なかむら けんじ
発表者：介護福祉士 中村 健児

医療法人が運営しているグループホーム。同法人のクリニックとの医療連携が強みである。

平成 21 年 2 月 1 日に開設。2 ユニット 18 名の方が生活されている。令和 5 年 11 月より、2 ユニットで共用型デイサービスを提供している。

(取り組んだ課題・はじめに)

2024 年より認知症基本法が施行された。私は認知症基本法の中の『認知症に関する国民の理解が深められ、認知症の人が地域において尊厳を保持しつつ、他の人々と共生する事を妨げない』という基本方針に着目した。寿限無は地域との連携を以前から重要視しており、積極的に地域のイベントに参加してきた。しかし、地域の方が気楽に寿限無に来て頂ける取り組みは行っていなかった。そんな折、運営推進会議にて民生委員の方より「寿限無を地域の方たちに開放出来ないか」との依頼を受けた。カフェに参加された地域の方の、認知症という病気に対する理解や知識が深まること。また、地域の方と触れ合うことが認知症の入居者様にとっても新たな刺激となるのではないか。この取り組みを続けていくことが、認知症基本法が求める理念に即しているのではないか、と考え演題のテーマとした。

(倫理的配慮)

カフェを運営する地域包括支援センターの職員及び、入居者様の家族様へ取り組みの概要をご説明し同意を得ている。併せて写真使用等の承諾も頂いている。

(具体的な取り組み)

運営推進会議の中で民生委員の方と地域包括支援センターの職員と打ち合わせを重ね、毎月第 2 水曜日に寿限無の多目的室を利用し『地域カフェ・ことぶき』として認知症カフェを開催することとなる。地域の回覧板に『地域カフェ・ことぶき』のチラシを配り、開催のアナウンスを行った。

『地域カフェ・ことぶき』にて寿限無の入居者様と地域の方々が接する機会を設け、カフェの中でお互いのことを話し合ったり、健康体操を取り入れて体を動かされている。地域の方の中にオカリナを吹く方がおられ、その方の吹くメロディに合わせて一緒に歌を唄っている。また、季節のイベントとして七夕に願い事を書く等の企画も行っている。

(活動の成果と評価)

認知症の入居者様が施設の中でどのように生活されているのかや、認知症の様々な症状は同じ地域にお住まいの方でも日常生活の中ではあまり伝わらない。しかし、地域の方が『地域カフェ・ことぶき』に参加し、認知症の入居者様と直接話をされることで、認知症という病気を少しでも理解して頂けたと思う。また、地域の方から施設職員へ入居者様の日常生活の様子や、認知症に対するの質問をされることもあった。施設職員との関わり合いの中からも、認知症への理解を深めて頂けたと思う。更に、『地域カフェ・ことぶき』の活動内容を地域の情報誌である【よみっこ】や、【八王子ジャーニー】というウェブ広報誌に掲載して頂けた。それにより近隣にお住まいの方々だけでなく、八王子市全域に私たちの取り組みが発信された。八王子市のグループホームでは初の試みとなる地域カフェの開催が、たくさんの方々が目にする事が出来るインターネットに掲載されたことで、様々な方が認知症という病気を知るきっかけになるのではないかと期待している。

(今後の課題・考察・まとめ)

『地域カフェ・ことぶき』を開催し、地域の方が認知症の方と直接触れ合うことが出来たが、まだカフェを開催して間もない為、参加される方は地域のご高齢の方が多い。今後は子供や学生、主婦の方など幅広い年齢層の地域の方々に参加して頂き、認知症の方への理解を深めて頂くことが課題であると感じた。現在は月に 1 回の開催だが、参加者の方から「月 2 回の開催は難しいのか。」とのお話も頂いている。開催回数を増やしながらかつ継続的にカフェを開催することで、認知症の方が社会に受け込みやすい土台や環境を作っていく。その役割をグループホームとして果たしていきたい。

(参考・文献など)

- ・厚生労働省 共生社会の実現を推進するための認知症基本法について

◆キーワード

- 1 認知症カフェ
- 2 地域連携
- 3 フレイル予防

笑顔を導く相関関係

京都府・京都市

グループホーム さくら

発表者：介護職・石井 良典

認知症対応型共同生活介護、利用定員 9 名	1 F：居室、キッチン、リビング、風呂等 2 F：居室のみ
-----------------------	----------------------------------

(取り組んだ課題・はじめに)

Covid-19 の対策期間中、外出機会が減少しており、利用者様の意欲や活力の低下が見られていました。特に今回対象とさせて頂いたご利用者様は元々大変お元気な方で、参加意欲の低下は顕著でした。そのタイミングで知り合いが認知症カフェの主催者様で、開催にあたってキャスト（店員）を募集している旨を伺った為、昔料理人を長らく経験されていたその方にマッチしていると考え、提案に至りました。

(倫理的配慮)

ご本人様と認知症カフェ主催者様へ、今回の調査協力及び研究発表について説明し、承諾を得ております。

(具体的な取り組み)

認知症カフェの一つである「まあいいかC a f e」へ、キャスト（接客を行う店員）としてご参加頂き、カフェでのオーダー取得と配膳、下膳などの業務へ参加頂きました。

令和5年10月と令和6年5月に2回ご参加頂いており、職員は私と送迎協力の後1名の計2名を事業所より、その他参加者は各5～6名程度の規模でそれに伴う付き添いの介護職員が1～2名ずついらっしゃり、会場となる飲食店様の職員を含め協力頂き開催しております。

元々飲食店で経験の豊富な方であった為、本企画に対してきっと興味をお示し下さるだろうと考えており、事実お誘いした段階から非常に楽しそうにお過ごしになられておりました。こうした興味傾向に合った内容提案が成果を出す上で最重要であると捉えております。

(活動の成果と評価)

お誘いした時点では若干の照れ隠しをしつつ、興味津々に概要資料を何度も見られ、大切にしまわれておりました。

当日には大変張り切られ、普段滅多に長時間の立ち仕事をされない状況であったにもかかわらず3時間もの立ち仕事を自主的になさり、笑顔や自発的なジョークなど、意欲の向上が見られました。

(今後の課題・考察・まとめ)

ICF構造からも分かる通り、こうした取り組みはその方の興味関心や人生観に合った内容で行う必要が高く、かつ継続的に実施する事で間接的な相関関係要素まで影響を及ぼす事が期待できます。その為、日々の業務の中で各職員が意識的に取り組む為の意義と目的意識の共有をいかに図るかが重要であると考えております。

(参考・文献など)

国立長寿医療センター 研究所 生活機能賦活研究部 大川弥生『ICF（国際生活機能分類）－「生きることの全体像」についての「共通言語」－』

地域住民のプラットフォームを作るために

◆キーワード

- 1 地域連携
- 2 地域拠点
- 3 地域貢献

地域居酒屋 HOROYOI の開催

茨城県常陸大宮市

みわ
グループホーム美和この だいすけ
介護福祉士：今野 大祐

1 ユニット式定員 9 名のグループホームです。

定員 40 名の通所介護が併設されております。

(取り組んだ課題・はじめに)

当事業所の所在する常陸大宮市旧美和村の第 2 層協議体「みわ茶話会」が 2 月に 1 度開催されますので、毎回必ず参加し民生委員や区長、包括支援センター職員、在宅介護支援センター職員と共に地域の課題について話し合いを行ってまいりました。その中で、「地域住民がもっと集まる場が欲しい、交流できる場が欲しい。過疎化が進み部落が寂しくなってきた」などの意見が出ました。そこで、地域住民のプラットフォームを作るために、何かできないかと考え、取り組んだことをここで発表させていただきます。

(倫理的配慮)

第 2 層協議体メンバーや来場者などに写真を撮影し、それを報告に使用することは同意を得ております。

(具体的な取り組み)

以前、大分県の国東市で「百円居酒屋」を実施し、地域住民の居場所や役割の確保に繋がった事例を思い出しました。また、常陸大宮市美和地区には、居酒屋が無く、以前は営業されていましたが、つぶれてしまった場所も多かったのが現状です。そこで、第 2 層協議体の中で、2024 年 4 月よりグループホームに併設されているデイサービスセンターのフロアにて 2 か月に 1 回居酒屋を開催してみたいと提案しました。第 2 層協議体からは、賛成の声が多数挙がり、2024 年 4 月からスタートとなりました。広報は、常陸大宮市の美和地区の民生委員協議会や区長会、地元のボランティア団体の総会に出席させていただき、説明を実施。また、施設の隣にお住いの住民に行き、まずは少数からの広報としております。

(活動の成果と評価)

広報の際、特に、民生委員協議会や区長会、ボランティア団体の総会にて広報させていただいた際には、様々な方から質問が多々挙がり、興味関心の高さが伺えました。

その予測通り初回である 4 月 28 日には、16 名の方の来場があり、参加者からは「こういう場所が欲しかった。」「ずっと続けてほしい」「次はいつやるのか」などの声が相次ぎ、HOROYOI の必要性を非常に強く感じました。

更に、第 2 回である 6 月 23 日には、18 名の参加と前回よりも 2 名増加しております。住民が口コミで広げてくれた事例も多く、18 名のうちの 5 名が初参加と徐々に広がっている状況です。また、参加者の一人である住民がコーヒーメーカーを持参してくださり、参加されている地域住民へ振舞ってまいりました。

(今後の課題・考察・まとめ)

居酒屋ということもあり、来場される地域住民は、50 代～60 代の男性が多い。目指すものは、多世代のプラットフォームとなりますので、多世代が集える企画へと変えていきたい。例えば、脱出ゲームや女子会の同時開催や夏休みであれば自由研究や工作の場所提供、体操教室の開催等、子供や女性住民、高齢者が集まるような仕掛けを作っていきたいと考えております。

また、現在は職員が中心となって開催をしておりますが、いずれは、おつまみや料理、アルコール飲料などを地域住民が持参し、地域住民が主体的に開催できるようなそのような会にしていきたいと考えています。

今後も地域包括ケア拠点を目指し、常陸大宮市美和地区にプラットフォームが複数存在できるような取り組みを続け、それらが地域住民主体となって、維持できる、そのような地域づくりを続けていきたいと考えております。

(参考・文献など)

大分県国東市「100 円居酒屋」の取り組み

演題番号

I-13

三滝自由区へぜひ一度おこしく下さい！

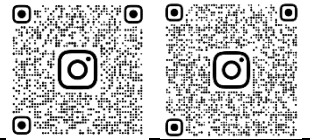
◆キーワード

- 1 地域貢献
- 2 地域連携
- 3 地域拠点

～そこで何が生まれるかは参加していただくみなさん次第です～

広島県広島市

みたき
グループホーム 三滝ひまわり



【GH 三滝】

【三滝自由区】

たまだ まさゆき
発表者：玉田 将之

もりかわ りえ
共同研究者：森川 理恵

医療法人みやうちグループ2つ目のグループホームとして、平成14年6月に開設。
木造平屋建て 定員18名。
近隣にて同法人グループが介護老人保健施設、通所リハビリテーション、居宅介護支援事業所、クリニックを運営。

緑と鳥のさえずりに囲まれた、閑静な住宅街に立地しており、入居者様と一緒に元気いっばいのスタッフとマスコット犬のレオくん楽しい日常を送っている。
そんな楽しい日常をインスタグラムにて発信中！

(取り組んだ課題・はじめに)

地域密着型サービスのグループホームといえは地域との関わりなくしては考えられないと感じている。我々のグループホームでも町内会、子ども会をはじめとする地域との関わりを大切にしてきた。そんな当たり前のことがコロナ禍で瞬く間に奪われてしまい、地域との繋がりが希薄になっていたところ思いついたのが「三滝自由区」と称した地域イベントである。

地域との繋がりがこれまで以上となるよう再構築したい！開設以来20年お世話になっている地域への恩返しをしたい！そんな思いを積み込んでコロナ禍真ただ中の2022年4月に生まれた「三滝自由区」。その成果と今後について報告する。

(倫理的配慮)

発表で使用する画像、名称の使用において全て口頭にて了承を得ている。法人の倫理委員会に倫理研究実施報告書を申請し、承認を受けた。

(具体的な取り組み)

三滝自由区では現在、飲食、物販、ワークショップといった地域周辺で活躍しておられる方々に声かけし、世代問わず楽しめるようなブース出店を依頼している。

三滝自由区の場合は天候、立地条件のことも考えて同じ町内で運営している同法人グループである介護老人保健施設三滝ひまわりの玄関前と1階ロビーを使用している。

開催の告知は各方面に協力を仰ぎ、入居者様ご家族様をはじめ、町内会回覧板、地域包括支援センター、地域情報雑誌、各SNSを通じて発信している。認知度向上のため、偶数月の第1日曜日に開催している。

発足当初はコロナ禍であったため、思い描いていた入居者様、家族様、職員も一緒に楽しめる地域イベントといった形が叶わない中でのスタートとなったことを付け加えておく。

(活動の成果と評価)

開催当初はどんなことを始めるのか？といったこともあり、地域へ受け入れてもらうまでに回数を要した。実際に足を運び、雰囲気を感じとっていただくにつれてだんだんと応援してもらえる声が増えていくようになった。

その後、町内会の年間行事表にも入れてもらえるようになり、今では地域行事として認められるようになった。そのうちに、地域住民から「私も出店したいわ。」といった声もあがり、女性会からは「三滝カレーを作って地域メニューにしたらどうかしら。」など色々な案が出てくるようになった。更に近隣大学の音楽科の学生が演奏しに来てくれたり、学生ボランティアからも応募があり、賑わいの創出に繋がっている。

三滝自由区開催日には、入居者様の作品や日々の様子が分かる写真などを展示するブースを作っている。入居者様にもご家族様と一緒に外出を兼ねて三滝自由区へ参加し、地域住民と一緒に楽しんでいただいている。

イベント開催以外ではグループホームの春まつりにて女性会の皆様発案の三滝カレーを入居者様と一緒に作って食したり、音楽科の学生には楽器演奏をしてもらったりとグループホームへの活動にも繋がっている。

地域との繋がりがこれまで以上に構築されていること、併せて運営推進会議にも地域から多数ご参加いただくようになったりするなど、グループホーム運営にも三滝自由区がプラスの方向へ働いていることも実感している。

(今後の課題・考察・まとめ)

コロナ禍で強く意識付けられた、人と人との直接的な関わりへの不安はまだ完全に払拭されたわけではないが、今後も三滝自由区を継続して開催し、更に地域へ浸透させてグループホームを含めた繋がりを広げたいと考えている。